

第三章 チェシャ猫

アリスは森の中を歩きます。

アリスはすてきな庭と、小さな家を見ます。

「私は大きすぎるわ」と彼女は思います。

「私はあの家には入れない。キノコのかけらを食べて、もう一度小さくならなくちゃ」程なくして、アリスは**23**センチメートルくらいの身長になります。

すると突然、召使いが森から出てきて、その小さな家に行きます。

召使いの顔は、魚のようです。

別の召使いがドアを開けますが、その顔はカエルのようです。

魚の召使いは、手に大きな手紙を持っていて、「公爵夫人さまへ。クローケーをしようという女王さまからの招待状です」と言います。

カエルの召使いは、「女王さまから！ クローケーをしようという公爵夫人さまへの招待状です」と言います。

「何て不思議な召使いたちなの！」と、アリスは笑いながら言います。

アリスはその家に行き、「入ってもいいですか？」と言います。

「ともかくドアを開けて、中にお入りなさい」と召使いが言います。

すると、アリスは公爵夫人を見ます。

公爵夫人は赤ん坊を腕に抱きながら、小さな椅子に座っています。

台所には料理人がいます。

料理人は、スープを作っています。

「スープにコショウが多すぎるわ」とアリスは思って、くしゃみをします。

そして、公爵夫人がくしゃみをすると、赤ん坊がくしゃみをします。

しかし、料理人と大きなネコは、くしゃみをしません。

ネコは料理人の近くに座り、ほほ笑みます。

アリスは公爵夫人に、「あなたのネコはどうしてほほ笑むの？」と尋ねます。

「だって、それはチェシャ猫ですもの」と公爵夫人は言います。

「チェシャ猫は皆、ほほ笑むものよ、あなたは知らないの？」

「いいえ、知りません！」とアリスは言います。

「あなたって、あまり知らないのね」と公爵夫人が言います。

すると突然、料理人がお皿やコップや鍋を、公爵夫人と赤ん坊にめがけて投げつけ始めます。

ひどい騒音で、アリスは怖くなります。

「ああ、気を付けてください！」とアリスは言います。

「かわいそうな赤ちゃん…！」

「赤ちゃんについては考えないでちょうだい」と公爵夫人は言います。

「それは私の赤ちゃんなの！」

公爵夫人は赤ん坊のために歌い始めますが、突然、公爵夫人は赤ん坊をアリスに投げてよこします。

「ほら、赤ちゃんを受け取ってちょうだい！」と彼女は言います。

「私は行って、女王さまとクローケーをして遊ばなきゃ」

公爵夫人は、家から走って出ます。

料理人は公爵夫人にお皿を投げつけますが、お皿は公爵夫人には当たりません。

アリスは、赤ん坊と一緒に外へ出ます。

赤ん坊は奇妙な音を立てます。

アリスが赤ん坊を注意深く見ると…それはブタの赤ん坊です！

「ブタだわ！」と、アリスは驚いて言います。

アリスがすぐに赤ん坊を降ろすと、赤ん坊は森の中へと走ります。

ちょうどそのとき、アリスは木にチェシャ猫を見ます。

チェシャ猫はアリスを見て、ほほ笑みます。

「こんにちは、チェシャ猫さん」とアリスは言います。

「私はこれから、どこに行ったらいいのかしら？」

「ふむ、君はどこに行きたいんだい？」とチェシャ猫は尋ねます。

「わ…私には分からないわ」とアリスは言います。

「君は、右手にあるその道を行けるよ、そうすれば君は帽子屋を訪ねられるんだ」とチェシャ猫は言います。

「それか、君は左手にあるその道を行けるよ、そうすれば君は三月ウサギを訪ねられるんだ。問題はないのだけれどね。二人とも気が狂ってるんだ」

「あら、まあ」とアリスは言います。

「私、気が狂ってる人たちなんて訪ねたくないわ」

「それじゃあ、君は間違った場所にいるんだよ」とチェシャ猫は言います。

「僕たちはみんな、ここでは気が狂ってるのさ。君だって気が狂ってるんだよ」

「私が気が狂ってるって、どうやってあなたに分かるの？」とアリスは尋ねます。

「君はここにいる」とチェシャ猫は言います。

「だから、もちろん君は気が狂ってるのさ」

「君は今日、女王さまとクローケーをするつもりなのかい？」とチェシャ猫は尋ねます。

「いいえ、私は招待状をもらっていないもの」とアリスは言います。

「僕はそこにいるつもりだよ」とチェシャ猫は言って、不意に立ち去ります。

それからチェシャ猫は戻って来て、「赤ん坊はどこにいるんだい？」と尋ねます。

「それは赤ちゃんじゃないのよ」とアリスは言います。

「それはブタなの！」

「ええ！」とチェシャ猫は言って、もう一度立ち去ります。

アリスは三月ウサギの家へ行きます。

「何て大きな家なの！」とアリスは考えます。

「けど、私はとても小さいわ」

アリスがキノコの反対側のかげらを食べると、アリスは大きくなります。